中国における回族ムスリム女性のジェンダー役割に関する言説の創出と流通
—浙江省義烏市における回族ムスリム女性を例として

The Creation and Distribution of Discourses on Gender Role of Hui Muslim Women in China
- A case study of the Hui Muslim women in Yiwu City Zhejiang

李　之易 Li Zhiyi

摘要

Previous studies on Hui Muslim women began to be published in the 1980s, along with the development of gender studies in China. And in the past 30 years, Muslim women's social advancement has always been one of the most discussed topics in the researches from cuMTural anthropology and other aspects. Most of the studies have paid close attentions to the cuMTural meaning of the Islamic gender discourse, which have great influence on the gender structure of the Hui people. Yet, many of them see the Islamic gender ideology as doctrines that impose on the believers top-down. And, while focusing on the religious discourses of the mosque, most of them rarely pay attention to how individual interpret the discourse and practice it in the daily life. At the same time, Muslim women go to the mosque much less comparing to men. Focusing only on the religious discourses of the mosque also means to marginalize Muslim women in the study. Addressing Islam as rigid doctrines and overlooking the practice of Muslim women in everyday life prevents the understanding of the meaning of individual's behavior, in the context of the transformation of religion in the ear of modernization. In order to overcome these trends of previous studies, this article try to reveal the agency of Muslim women as they adapt themselves to the Islamic ideology, meanwhile use the non-religious discourses to negotiate with it. These articles take a close look at the employment of Hui Muslim women in Yiwu City, Zhejiang province. Especially pay attention to Muslim women's narratives about women's gender role. Living in the urban area of contemporary China, both discourses of gender equality under socialism and Islam have effected on those women. By using the existing discourse to negotiate within the gender ideologies, they try to answer the question as what is the gender role of a "female" and a "Muslim" by themselves.

キーワード ***ジェンダー役割: gender role　言説: narratives　ムスリム: Muslim　中国: China***

はじめに

中国のムスリム系の一民族である回族の研究は、歴史の中で回族コミュニティーの文化変容を中心テーマとして蓄積されてきた。1980 年代にはいると、中国におけるジェンダー学の発展と共に、回族女性に関する研究成果が発表され始めるようになる（丁 2002：102、馬 2008：83）。ことに 2000 年以降は文化人類学などの民族誌的研究も増加している。そこでは、ムスリム女性の社会進出がその主なテーマの 1 つであることが分かる。先行研究の重要性は否定するべくもないが、その議論には共通する傾向があったように思われる。

第一には、これらの研究では、ジェンダーの文化的な意味や価値に注目しているが、回族のジェンダー構造に大きな影響を与えているイスラーム的なジェンダー言説を不変的、かつ普遍的なものとみなし、単に上から信徒に押し付けられる教条的なものとして扱っている点である。そして、その際にまず重要視されるのは、モスク中心の宗教言説である一方、個々のムスリムがそれらの言説をどのように解釈し、実践しているのかについては注視されることはほぼないのである。現状のムスリムの宗教体制の中で、モスクにおいて女性信徒は周縁化されているという事態を鑑みれば、モスク中心の宗教言説を一方的に重視することは、女性ムスリムの姿を研究から消去することにつながりかねない。この点が共通する二点目の問題点である。

イスラームを硬直した教条的なものとして扱うこと、日常生活の中の女性ムスリムの実践を見落とすことは、近代化に直面する宗教の変容という背景の中で個々の人々の行動の意味を理解することを阻んでいる。先行研究のこうした傾向を打開するために、日常の中のムスリム女性たちの姿を、意思をもち選択を行う存在として可視化し、イスラームのイデオロギーに適応し、同時に、言説を利用するなかでイデオロギーと交渉するプロセスを描写することが必要になる。

本研究では、浙江省義烏市における回族ムスリム女性の就業を中心とした社会進出をテーマとする。現代中国都市部という時代的地域的背景のもとで、社会主義的な男女平等、イスラームの宗教言説の中の女性のジェンダー役割に関する様々な言説が錯綜する現状の中で、ムスリム女性の語りに注目したい。個々の女性が「女性」として、そして「ムスリム」としてのジェンダー役割をどのように理解しているのか。彼女らの語りの中で、既存言説に対する能動的な利用、そして女性の間の言説の流通に焦点を当てたい。具体的には、まず、第 1 節で女性の役割に関する中国主流社会のジェンダーイデオロギーとイスラームのジェンダーイデオロギーを概観し、その多様性を明らかにする。続く節で、市内におけるムスリム女性に特に人気のアラビア語通訳と微商[1]と言う職業の民族誌的な事例を取り上げる。

1. 女性の役割に関する中国主流社会のジェンダーイデオロギーとイスラームのジェンダーイデオロギー

これから考察する女性ムスリムの語りが置かれている言説領域がどのような状況であるかを

提示するため、中国における社会主義的近代化の中で形成されてきた女性のジェンダー役割に関する諸言説を、ここでは三層に分けてみて行きたい。具体的には、第一に、研究対象の回族ムスリム女性たちに影響を与える世俗的な中国主流社会の言説、第二に、国家によってコントロールされるイスラームの宗教言説、そして最後に、ムスリム「女学」の中で流通している主な言説を紹介する。中国の場合、特定のイデオロギーに注目するだけでは現実に起こる現象は理解できないことを確認する。

1．1．社会主義的な「男並みの男女平等」

毛沢東時代から繰り返し宣伝されてきた「女は天の半分を支える（妇女撑起半边天）」というスローガンは、中国共産党政権の女性政策の最も要を得た用語であると思われる。建国以後、「男女平等」は基本国策として、現代中国の公的言説領域における正統的なジェンダー観であると言えるだろう（関西中国女性史研究会 2014:74）。男性と同じように社会に進出し、国家建設や自分の家庭のために力をささげる新中国の理想的な女性像は長年の教育やイデオロギーの浸透により、社会に根ざしている（鄭 2012：84－86）。

ところで、近代化がもたらす公領域と私領域の分離の結果、女性の公的な場面での進出を重視する一方、私的な場面でのジェンダー構造の変革に対する国家的関心は希薄である。公的な領域の主流である男女平等の言説は私的な領域において影響力が低く、家の外で経済的役割を果たす一方、家の中で、妻として母として家事や育児を担うことは主に女性の責任であるという考えは今でも当然視されている（顧 2014）。

1．2．中国イスラーム協会の言説におけるジェンダーイデオロギー

主流社会のジェンダーイデオロギーと対照的に考察するために、中国イスラーム協会[2]によって編集され出版された『新編臥爾茲演講集[3]』の中の女性の権益に関する内容を挙げて、現代中国における国家によってコントロールされる公的な領域のイスラームのジェンダー言説を述べる。

「尊重婦女、保護婦女（女性を尊重し保護する）」[4]をタイトルとした１章のまとめの部分に次のような内容が見える。

> 男性と女性はお互いに平等であり、善を行う限り、アッラーから同じ報酬が得られる。イスラーム教は男女の生理上の差異を重視する。そのため、男女平等を主張すると同時に、男女分業を強調している。（中略）…よって、イスラーム教は女性の家庭での責任と役割を特に強調している。

第４章「鼓励婦女接受教育 不反対婦女参加社会活動（女性が教育を受けることを励まし、社会活動への参加を反対せず）」[5]の中では女性の教育問題と社会進出について次のように書いている。

> （中略）教育を受ける権利を女性に与えることは女性問題に関するイスラーム教の重要な主張である。（中略）ムスリム女性が外で働き、家庭の収入に寄与し、社会のために自分

の知恵を貢献することはイスラーム教の精神に合致している。一方、外で働いている女性は自重自愛し、イスラーム教の倫理道徳を遵守すべきである。

以上の内容から、国家によってコントロールされる宗教言説の中のイスラーム的なジェンダーイデオロギーの特徴を見出すことができる。つまり、男女の生理的な差異に基づく役割分業を承認する上で、アッラーの前の男女の平等を強調している。そして、女性の教育を受ける権利を提唱し、女性の社会進出に反対しないと同時に、女性の家庭内のジェンダー役割を特に重要視していることである。ところが、中国の場合、国家権力が宗教的な領域まで浸透してきていることに対する不満と、「準行政組織」であるイスラーム協会に対する不信感が一般信徒の間で広がっている現在、公的な宗教言説の影響力は低下しつつある（奈良 2017：134-138）。全国的なイスラーム組織の権威の欠如は、中国ムスリムの間で宗教言説の対立を招いている。その多様な言説の中で、義烏市における回族ムスリム女性に大きな影響を与え続けているのは、ムスリム「女学」で流通しているジェンダー言説である。

1．3．「女学」の中で流通するイスラーム的賢妻良母言説

回族コミュニティにおける「女学」とは女性ムスリムのための宗教学校であり、イスラーム世界の中の特殊的な存在である[6]。後述するように、本研究の調査対象である義烏市の女性アラビア語通訳のほとんどは、女学の卒業生である。松本（2010）は女学の中で流通している言説を考察し、イスラームに基づく女性の家庭内の妻と母のジェンダー役割を特に強調するジェンダーイデオロギーを「イスラーム的な賢妻良母」と呼んでいる。20 世紀初めにあった近代学校としての女学の創設とその後、1980 年代に顕著になる女学の復興という歴史から見ると、「イスラーム的な賢妻良母」言説の源流には次の 2 つの契機があると考えられる。

その一つは、清末民国期の初頭、近代西洋との出会いを契機として、主流社会における新文化運動の潮流の中で勃興した、伝統的ジェンダーイデオロギーに対する批判と再編の影響である。妻と母の役割を通じて民族の繁栄を達成することは女性が担う社会的責任であるという言説は、当時の女性の社会的地位の向上という取り組みに理論的な根拠を与えた。女性の「素質」を向上させるための女性教育は、女学の創設によって急速に推進された（馬 2009、松本 2010）。

他方、1980 年代、復興を迎えた女学の中での賢妻良母の言説は、1970 年代以後の中東のイスラーム運動の影響を大きく受けている。西洋本位の近代化への反発はその特徴である。女性は妻と母の役割を通じて堕落した世を変える、敬虔な女性は男性に負けないなど「敬虔さに立脚した男女平等」の言説が 1980 年代以後、女学の中で主流となっていった（松本 2010）。

以上、現代中国社会におけるムスリム女性が直面している状況は、特定のイデオロギーや言説から一元的に解析するだけでは、現実に起こる現象を把握することができないと考えられる。多様な言説が交錯している領域において生きるムスリム女性たちは、日常生活の中で、女性の役割についてどのような考えを持っているのか。先行研究の中では取り上げられてこなかった個々のムスリム女性の声にこそ焦点があてられなければならない。

2. 義烏市における回族ムスリム女性

本研究の調査地域である義烏市は浙江省中部に位置する[7]。ビジネスのために、現在、1 万人前後の外国ムスリムが義烏市に駐在している。そのような外国ムスリムの流入とともに、多数の中国ムスリムが出稼ぎ労働者として義烏市に来て、卸売市場や貿易会社での通訳などの関連ビジネスで働くようになった。2014 年 6 月時点、義烏市市内の外来中国ムスリムは 10846 人である。その中で回族は 8575 人であり、主な流出地は寧夏、新疆、河南、青海、雲南などのムスリム集中地域である[8]。男性が 4923 人、女性が 3652 人である。女性ムスリムは多くが 20 代～30 代の結婚適齢期に集中している。彼女たちは、就業状況から有職女性と専業主婦とに分けられる。

義烏市に滞在している未婚の回族ムスリム女性のほとんどは生計を維持するために働いている。貿易会社での通訳の仕事は、その収入の安定性から女性に一番人気がある。一方、貿易会社に就職するためには、アラビア語を運用する能力を身に着けていることが前提条件となる。本研究でのフィールド調査[9]を通じて明らかになったのは、通訳に従事している女性の多数は公立中学校（あるいは高校）を卒業後、3～4 年制の私立アラビア語学校を経由して義烏市に渡って来たということである。少数だが、その中で大学卒業生や留学の経験を持つ女性もいる。これらの未婚ムスリム女性たちは結婚適齢期に集中しているため、2～3 年働いた後、結婚する人々が多い。

他方、市内における回族ムスリムの専業主婦もまた 2 つのグループに分けられる。1 つの類型は、結婚をきっかけに移住してきた女性たちである。彼女たちの多くは通訳を務める男性と 20 歳未満で結婚し、主婦として西北の農村地域から市内に移住して来ている。移住して 1～2 年後に、子供を産む人がほとんどである。この類型の女性たちは、移出地である西北農村地域のムスリムコミュニティの中で共有されている保守的なジェンダー観が一因になり、世俗的な教育レベルでも、宗教的な教育レベルにおいても、通訳を務める女性たちに及ばない。もう 1 つの類型は、結婚後、仕事をやめて専業主婦になった女性たちである。市内にある貿易会社は規模が小さいため、女性社員に対する産休・育休の制度がなく、1 ヶ月以上休みが必要な場合、会社を辞めなければならない。そのため、女性通訳が結婚後、特に子供ができた後仕事を辞めて、主婦になることが多く見られる。さらにいえば、育児と家事という負担以外、次節に述べるように市内の公的なイスラーム言説における女性通訳に対する非難も、また、女性の結婚後の社会進出を阻んでいる。次に、義烏市内の女性通訳が直面する状況についてみていこう。

3. 回族ムスリム女性通訳におけるジェンダー役割に関する言説の創出

3．1．市内のムスリムコミュニティにおける女性通訳に対する宗教上の非難

通訳は現在義烏市にいる若いムスリム女性にとっての人気職業である一方、まわりから尊敬

を得る仕事とは言いがたい。市内の中国ムスリムコミュニティにおける公的なイスラームジェンダーイデオロギーの中でジェンダー役割に関する言説を考察するため、女性の家庭外の就労について、コミュニティの宗教的権威を代表する義烏市モスクのイマームに、インタビューを行った。イマーム LGQ、はインタビューの中で以下のように語っている[10]。

> イスラーム教は男女平等を提唱しています。信仰深い者は、男でも女でも、来世は楽園に行けます。（中略）男性は力や理性を利用して外で働き、女性は母性を利用して家事に専念することはイスラーム教で提唱されています。女性のなすべき職務は妻と母という役割を果たすことです。（中略）もちろん、妻と母の役割を果たして、また余裕があれば、あるいは未婚の女性なら、家庭の外で仕事をすることも可能です。その時は、イスラーム教の教えに従って、女性にふさわしい、よいとされる仕事を選ぶべきです。たとえば教師、医者、公務員、あるいはボランティア活動など、社会に貢献できる仕事はいいと思います。（中略）しかしやはり、女性は家庭を中心にすることに越したことはありません。昔と比べると、現在の女性たちは物欲が高くなっています。義烏市にいるムスリム女性のほとんどはお金のために働いています[11]。

イマーム LGQ の語りから、家庭内の役割を女性の「本業」として認識し、一方、家庭外の仕事も認めてはいるが、それは「女性にふさわしい、よいとされる仕事」に限定されていることがわかる。インタビューの中では、女性が通訳を務めることについて、「通訳という仕事は女性に相応しくありません。若い女性が 1 人で、毎日外国人のバイヤーに同行して市場に行くことは賛成できません」と語られている。ビジネス相手である外国商人の多数は男性であり、結婚適齢期の女性通訳との仕事上の付き合いを通じて、婚前・婚外の男女交際になる恐れがあることが挙げられている。

これまで見てきたように、イスラームに基づくジェンダー観を基準に考えれば、家を経済的に支える責任がない女性が、男女の隔離という戒律に違反し通訳を務めること、つまり家庭内のジェンダー役割より、経済役割を重視することは、「お金のことしか考えていない」不敬虔な態度であるという烙印を女性通訳に付与する原因となり得るのである。一方で、女性は家庭内の役割を果たせば十分であるという考えは、主流社会のジェンダーイデオロギーとの間に当然葛藤が生じる考え方であり、全てのムスリムによって共有されているわけではない。さらに、義烏市に居住するムスリム男性の経済的地位はさほど高くないこともあって、家計維持という目的からも女性たちが就労することは一定程度必要とされている。次節では、こうした状況の中で通訳という仕事に携わる女性たち自身の、ジェンダー役割についての語りを見ていくことにしよう。

3．2．女性通訳の語り

29 歳の MT[12]は 2010 年義烏市に来て、通訳として働き始めた。女性のジェンダー役割について、次のように話した。

アッラーの前で男性と女性は平等です。男性と女性の差異は地位の差異ではなく、肉体的、心理的な差異だけです。そのような差異が存在しているから、男は働いて、家族の生活を支える責任があります。女は家事をして、子供の世話をする責任があります。（中略）それはアッラーの教えだから、私たちは従います。しかし、私たちが社会生活に参加し、外で仕事をすることが禁止されているわけではありません。（中略）私は夫の家政婦になりたくはありません。夫に依存し、夫にお小遣いをねだることはいやです。仕事を通じて、自立したいです。

27歳のLSR[13]は次のように話した。

女性は仕事がない限り、他人からの尊敬は得られません。それが中国の現実です。イスラームは家庭内の仕事を女性に委ねており、家庭外の仕事を男性に委ねています。仕事に尊卑はありません。そのため、男と女の間も尊卑はありません。でも、今、主婦を軽視する人がほとんどです。自分を守るために、女性も働かなければなりません。

31歳のBJ[14]は、インタビューの中で「通訳は本当に女性にふさわしくない仕事です。同僚や商人の間でお互いにだまし合って争うようなことには耐えられません」と語るが、一方、夫が無職であるため、結婚後でも仕事を続ける必要があった。彼女は、ジェンダー役割について、次のように話した。

イスラームの教えによっても、夫が家庭の中で主導的な役割を果たすべきです。妻は外で働いて、経済的に家を支える責任はありません。ちゃんと家事や育児をすれば十分です。（筆者：主婦になりたいですか）いいえ。主婦になる気はありません。中国はサウジアラビアとは違う。（中略）仕事がないと夫や嫁ぎ先、そして周りの人に軽く見られます。家で家事や育児に忙しくて、社会から離れ、社会的知識の勉強や、自分の外見にも気を遣わなくなると、いつか夫に捨てられます。だから、女性は自分の仕事がないといけません。それはお金だけの問題ではないのです。

出身階層、学歴、そして未婚、既婚などのライフステージに応じて、女性のジェンダー役割に対する周りの期待や女性自身が持つ心情や悩みもかなり違っている。ここでは、義烏市で通訳を務める3人の女性の語りをみただけだが、イスラームの教義に対する受け止め方、さらに女性の就労の必要性についての、それぞれの説明のしかたは同一ではない。しかし一方で、この三つの語りから見て取れるのは、市内で通訳を務める女性たちのジェンダー役割に関する考えは各種に解釈の道筋が用意されており、イスラームの教義から一方向的に規定されるものではなく、女性たちもまたそれに受動的に従うだけの存在ではないということである。次節では、女性たちの語りの中で、既存の言説の能動的な利用に注目しよう。

3．3．ジェンダー役割に関する独特の言説の創出

前述したように、現代中国において、ジェンダー役割に関する言説には複数性があることを、ここで再度強調したい。また、国家政策の制約を受け、一般ムスリムのあいだでのイスラーム

法の強制力が相対的に低く、権威を持つ統一的な声も現実的には存在していない。各ムスリムコミュニティの中でイスラームの教えについての解釈はそれぞれにありうるのである。

市内における女性通訳の生活史から見れば、回漢雑居率が高い町で生まれ育った人がほとんどである。少なくとも中学校までは公立学校に通って、義務教育を受けてきた。その後、女学に入学し、宗教教育を受け、ムスリムとしての自覚が強くなっていく。女学卒業後、東南沿海地域の都市部で就職している。こうした生活史的移動を通じて、彼女らが持つ女性の役割に関する考え方は、現実に中国の主流社会とムスリムコミュニティにおける多様な言説の影響を受けていると考えられる。その影響の痕跡は、女性たちの語りのなかに見てとることができる。

その１つは家庭内のジェンダー役割を重要視することである。そして、ほとんどの女性が家庭内の役割とイスラームのジェンダーイデオロギーを関連づけている。ところが、3 人のインフォーマントはいずれも賢妻良母の役割だけでは自己実現することはできないと考えている。上述の語りの中でも、世俗的な主流社会の女性の社会経済的な役割を重視する言説を見出すことができる。

一方、それぞれの女性にとって、主流社会とイスラームのジェンダーイデオロギーの双方の影響を受けることは、社会経済的役割と家庭内のジェンダー役割の矛盾に直面することを意味している。こうした二つの価値観の狭間にいる女性ムスリムたちは、後者を一方的に重要視する義烏市ムスリムコミュニティにおける公的な宗教言説によって非難されつつある。ところが、このような宗教的権威による言説から制約が課される状況の中で、女性たちはただ沈黙しているわけではない。それとは逆に、インタビューの中で確認できるのは、自分の行動を正当化するため、言説を積極的に活用している姿勢である。

その１つは、宗教言説を承認することである。前述したように、イスラーム的な「賢妻良母」言説は近代の産物であり、宗教知識人や女学を通じて女性に影響を与えている。こうした言説の中では、妻や母の役割を果たすことを宗教的敬虔さとして扱い、同時に、女性に家庭の管理者、子供の養育者としての地位を与えている。経済的に自立できる女性通訳たちは、なぜ「賢妻良母」のジェンダーイデオロギーを承認するのだろうか。ここでのインフォーマントたちの場合、その根底にあるのは、規範に従順であるという宗教的敬虔さの表れであり、それを通して自分たちのムスリムとしてのアイデンティティを主張し、ムスリムコミュニティの中での社会的地位を相対的に向上させようとする願いでもあると考えられる。

ところが、モスクなどの公的な言説領域で発言場を持っていないムスリム女性たちにとって、このような宗教言説への承認だけで、家庭内の役割を一方的に重視するコミュニティの中の公的な宗教言説に交渉し相対していくことは困難である。女性たちはそのような状況をきちんと認識していると考えられる。そのため、自分の家庭外の就労を正当化するために、宗教言説以外にも、彼女たちはまた主流社会のジェンダーイデオロギーに基づいて、世俗言説を積極的に利用している。

3 人のインフォーマントたちはいずれも、語りの中で、主流社会の影響を受ける周りの人の家庭内の役割に専念する女性への軽視について言及している。家事労働に専念し、社会との繋がりを失った専業主婦は人によって軽視され、幸せな家庭生活を維持しがたい。この種の言説は「賢妻良母」を高く評価するイスラームのジェンダーイデオロギーに対し、主流社会において男並みの男女平等を中心にするジェンダーイデオロギーの下で、女性の家庭外の就労を推進するために、頻繁に提起されている。言うまでもなく、ムスリムコミュニティの中で全ての男性が、実際に主婦を軽視しているというわけではない。こうした言説のなかで遂行されているのは、世俗的な言説を引用し、主流社会や、周りの一部の男性がイスラーム的な賢妻良母に立脚する男女平等を認めないことに対する指摘を通じて、自分の家庭外の就労を止むを得ないこととして、正当化することである。

上述したような、既存の宗教的ジェンダー規範を受容し強調すること、また主流社会の言説を引用することは、女性たちの語りの中で同時に遂行されているものである。女性に関する複数の言説は、彼女らが直面する家庭内の役割と社会経済的な役割とのジレンマをもたらす。一方、その複数性は同時に、女性たちが現実に応じて、言説を選択する可能性も開くものとなっている。異なる言説はまた女性たちが自分の実践を正当化するための語りを創出する時の材料ともなるのである。そのような世俗言説の引用は、男性中心の宗教言説によって周縁化されている女性たちにとって、公的な宗教言説を相対化するプロセスにおいて、極めて重要な要素であると考えられる。そして、ここで女性通訳たちが語っているこうした世俗と宗教のハイブリッドな言説は、さらに視点を広げてみれば、経済活動を通じて市内の女性ムスリムの間で流通していっている。そのことを次節で見ることにしよう。

4. ネットビジネスを通じたジェンダー役割に関する言説の流通

4. 1. 義烏市におけるネットビジネスの発展とムスリム女性の参入

中国におけるスマートフォンの普及と共に、ネット通販は爆発的な発展を迎えている。2015 年度、中国の全国インターネット小売額は 3.88 兆元（約 62.6 兆円）であり、ネット通販利用者は 4.13 億人となり、いずれも世界最大である[15]。「日常雑貨の世界スーパー」である義烏市はネット通販商品の主な生産地の一つとして、近年、商機を捉え、ネットで販売する商品の開発に積極的に取り込む専門会社が雨後の筍のように設立されている。これらの会社は商品をネットで販売するために、販売代理人としてネットビジネス従業者を募集する。「微商」と呼ばれるそれらの個人は供給側から商品を購入し、購入した商品をインスタントメッセンジャーアプリを通じて販売していくことになる。

こうしたビジネスモデルは、売り手である微商に対する制約が少ない。低資金で、スマートフォンさえあれば、誰でもタイムライン機能を通じて友達に商品を売ることが可能である。義烏市の場合、早くも 2011 年頃、ムスリム女性通訳の中で、結婚後、仕事を辞めて微商を始めた

人が現れている。微商は家事や育児を中心にする一方で、仕事を通じてお金を稼ぎ、自己実現したい女性に、家庭と仕事を両立する機会を提供してくれる。そのため、2013年以後、市内にいる既婚ムスリム女性の中で流行してきているのだ。そして、ネットビジネス会社も、またプロモーションを利用し、ムスリム女性の微商への参加を勧めている。次項から、義烏市のムスリム微商会社「クライシュ香水会社」を例として、女性通訳の節で考察された、男性中心の宗教言説と交渉するため創出されるハイブリッドな語りが、いかに商業活動に利用され、ムスリム女性の中で広まっていくのかを考察する。

4．2．クライシュ香水会社の事例

クライシュ[16]香水会社は、2015年4月に義烏市で創設された。サウジアラビアから香水を輸入し、義烏市でパッケージした後ネットで販売する。アルコールフリーの「ムスリム香水」として、コミュニティの中で人気を博してきた。会社のネットビジネスの運営を担当するWX[17]は回族ムスリムである。大学卒業後、義烏市に来て、通訳になった。市内ムスリム女性の中で広い人脈を持つため、クライシュ香水会社のマネージャーの職に就いた。彼女は信仰に対する熱心さはビジネスに対する熱意と融合することができると主張している。

前述したように、商品の販売を促進するためには、販売代理人をたくさん採用することが鍵になる。クライシュ香水会社の販売代理人の募集と管理はWXが担当している。2015年6月、ラマダンの期間に、彼女は募集活動[18]の中で、「信仰第一、家庭第二、商売第三」というスローガンを提出した。当時、次のように話している。少々長くなるが、一部を引用する。

> 皆さんご存知だと思いますが、クルアーンの中に次のような文章があります。“礼拝が終ったならば、あなたがたは方々に散り、アッラーの恩恵を求めなさい（62：10）”[19]。ここでは礼拝、そして生計を営むことが提起されています。また、アッラーはこの２種の実践に優先順位をつけています。礼拝が終った後に、生計を営みます。信仰が第一であることを、皆さん忘れないでください。
>
> （中略）礼拝が終った後、私たちはアッラーの教えに従って、暮らしのために働きます。ここいる皆さんのほとんどはムスリム姉妹、特に子供がいる既婚の姉妹です。女も女の仕事があります。すなわち、家族の世話をすることです。良いムスリム妻は、夫にとって、現世の最高の幸せであり、後世天国に行くための扉です。また、女は子供の最初の先生として、次世代のムスリムを養成することを担当しています。アッラーは私たちムスリム女性に重大な責任をゆだねています。それは私たちの使命です。
>
> もちろん、余裕があれば、夫の負担を軽減するために、微商に従事することができます。
>
> （中略）市内の多くのムスリム女性は、結婚した後、家庭の主婦になっています。学歴も持たず、創業のための元手もありません。毎日、家で掃除、料理、あるいは育児に専念しています。もちろん、それらのことを全部しっかりできたら、素晴らしいムスリム女性だと思います。でも、私たちは中国社会で生きています。今の時代、外で働いている男性は

たくさんの誘惑に直面しています。あなたの旦那さんが家に帰って、夫婦の間で雑談をする時、あなたは家の外の社会について、何も知りません。家事や子供のことしか話題になりません。そうすると、旦那さんもだんだんあなたと会話をすることに嫌気を起こすでしょう。

（中略）家にいるムスリム女性たちは、微商を通じて、外の社会との接触を維持し、ムスリム友達をたくさん作れます。家族のために、頑張っているあなたの姿を見て、子供もあなたをもっと尊敬し、旦那さんもあなたを大切にします。同時に、微商は家事や育児のじゃまもしないし､家庭外の仕事のような､男性との直接的な接触も避けることができます。

（中略）ムスリムの家庭の主婦たちにとって、相応しい仕事だと思います。でも、信仰と家族よりビジネスを重視することは禁止です。（中略）私たちはムスリム微商として、「信仰第一、家庭第二、商売第三」と言うことを忘れないでください。

ここでは、家庭内の役割を重視する宗教言説への承認を通じて、ムスリムのアイデンティティを強調し、クライシュ香水会社のムスリム会社としての特徴がアピールされている。また、ある意味で、家庭外の就労が既婚ムスリム女性に相応しくないこともほのめかされている。それと同時に、社会経済的役割を重視する世俗言説を引用し、主流社会の主婦に対する軽視を提起することを通じて、女性の微商への参加を勧めている。こうした形式は、前節で考察した女性通訳が自分の家庭外の就労を正当化するため利用するハイブリッドな言説と基本的に同じで構造をとっている。WX 自身はクライシュ香水会社に就職する以前には、市内の通訳の 1 人であった。WX の宗教的敬謙さとビジネスの才能に感服し、心から慕って、クライシュ香水会社の代理人になった人は多数いる。

市内在住の代理人の 1 人である AYS[20] は、以前は専業主婦として暮らしていた。微商を始めた後のインタビュの際に、次のように語っている。

以前は、毎日家の中に閉じこもって、社会との接触も少なかった。他の人と比べると、ずっと劣等感を持っていた。でも、微商を始めて以降は、忙しくなったが、不思議と気持ちが晴れてきた。今ようやくわかった。女は自分の稼ぎがないといけない。でもどんなに忙しくても､家族のことを大切にしなければなりません｡信仰を強め､家族を大切にすれば､自然に、商売もうまくいくと思います。

2017 年 3 月の時点で、クライシュ香水会社の販売代理人数は既に 800 人以上に達している。そして、WX の語りもまた経済活動を通じて、全国代理人たちの中に広まり、AYS を始め、他のムスリム女性に影響を与えていると考えられる。

まとめ

本研究では、ムスリム女性の就業に関する事例を通じて、現代中国都市部という歴史的、社会的現実の中で、ムスリム女性たちがいかにジェンダーイデオロギーによって制約されている

かを論ずる、と同時に、自分の経験を介して、「ムスリム」として、「女性」としてのジェンダー役割を理解し語っているか､それらの語りがいかに流通しているかを記述､分析してきた。

回族ムスリムたちは少数民族として、そして宗教信仰者として、社会主義国家である中国の中で生きている。言うまでもなく、イスラームのイデオロギーは、彼（女）らにとって、非常に重要である。しかし、そのイデオロギーは決して不変的、かつ普遍的な教条ではない。そして、イスラームは回族ムスリムの生活の中の唯一な信条体系というわけでもない。女性の就業に関する言説からみると、彼女たちの周囲には、現代中国におけるジェンダー役割に関する複数の言説が存在しているのである。

そのような背景の中で、第 3 節で取り上げた事例では、家庭内のジェンダー役割を一方的に強調するコミュニティの中の公的な宗教言説からの非難に直面した女性通訳たちは、主流社会の言説と宗教言説を同時に利用し、語りの中で双方の言説を織り込むことを通じて、日常的な文脈の中で、自分のムスリムとしてのアイデンティティを強調しながら、家庭外の就労を正当化するという試みを行っている。

また、第 4 節で取り上げた市内におけるムスリム女性の微商への参加の事例では、モスクを介するのではなく、主婦の副業として扱われている商行為を通じて、女性通訳の独自の語りが他のムスリム女性に広まり、女性の中のジェンダー役割に対する再考を促している事例を検討してきた。

しかしながら、こうした実践も、第 3 節で取り上げた事例と同様に、コミュニティの公的な宗教言説自体を変革しうるものではないだろう｡これら 2 つの事例に共通してみられる特徴は、回族のムスリム女性は、男性宗教エリートがその中心になる公的な宗教言説に公然と質疑を出すことを避けているという点である。つまり、公的な言説領域に直接に参入しないこと、公的な宗教言説を否定しないことである。その意味で、女性たちの語りは一見すると宗教上の家父長制に対する抵抗や変革には向かうものではなく、消極的にみえるかもしれない。

しかし、本研究で論じてきたように、そうした語りは日常の文脈の中で、積極的な意味も見出せる。宗教と世俗の境界を曖昧化にするそのような語りは、複数のイデオロギーの間のささやかな隙間の中で、多様な言説に対する取捨、変容、そして混合によって形成されたものである。それは、もはや主流社会、あるいはイスラームの既存言説の拙劣な複製と見なされるべきものではなく、彼女たち自身の実践から生まれた独自のハイブリッドな言説であると考えられるのである。それを通じて、女性たちはイスラームの賢妻良母を承認し、ムスリムのアイデンティティを強調すると同時に、時代に落伍しないため、良い夫婦関係を保つため、あるいは経済上の自立を確保し、社会的地位を向上させるためなどのさまざまな理由を包含しつつ、自分の社会進出を正当化することが可能になる。女性たちの語りは公的な宗教言説を変革することを狙うものではない。あくまでも日常生活の中で、社会経済的役割と家庭内の役割との間のバランスを模索する時、自身の行動を一時的に正当化するための「臨時措置」にすぎない。しか

し、変動する中国都市社会の多様な価値観の隙間で展開されるこうした言説の創発性とハイブリッド性は、市内における回族ムスリム女性のジェンダー役割に関する語りを特徴づけると同時に、彼女らが日常の中で自身の言葉でジェンダー役割を語っていくことを可能にしているのである。

参考（引用）文献

日本語文献

澤井充生「中華人民共和国の「宗教団体」に関する一考察――イスラーム教協会の事例」『人文学報』（東京都立大学人文学部社会学科・首都大学東京都市教養学部都市教養学科）第四百三十八号、 三十五～六十一頁、2011 年

鄭楊「市場経済の転換期を生きる中国女性の性別規範 ：3 都市主婦のインタビュー を通して」、落合恵美子・赤枝香奈子 編『アジア女性と親密性の労働』、百五十三～百七十四頁、京都大学出版会、2012 年

奈良雅史『現代中国の“イスラーム運動”―生きにくさを生きる回族の民族誌』、風響社、2016 年

松本ますみ『イスラームを知る 7:イスラームへの回帰―中国のムスリマたち』、山川出版社、2010 年

中国語文献

丁宏「谈回族研究中的性别意识」『回族研究』3:102-105． 2002 年

顾辉「国家、市场、社会和家庭交织影响下性别观念的回归」『社会科学辑刊』3：33-40．2014 年

马燕「20 世紀 80 年代以来的回族女性研究述评」『妇女研究论丛』2:82-86．2008 年

「女性宗教文化的中国化―民末清初教会女校与清真女学的比较研究」『回族研究』4：2009 年

马艳『一个信仰群体的移民实践』．中央民族大学出版社．2012 年

英語文献

Jaschok,Maria. Shui Jingjun. *The History of Women's Mosques in Chinese Islam.* Psychology Press. 2000.

注

1　後ほど詳しく説明するように、中国では、インスタントメッセンジャーアプリ（主に QQ とウィーチャット）を利用し商品を販売するビジネスモデルを「微商（ウィーチャットビジネス）」と呼んでいる。現在、それはビジネスモデルだけではなく、それに従事する人たち（ウィーチャットビジネスマン/ウーマン）を指す言葉にもなっている。

2　中国イスラーム教協会は中国共産党の指導を受ける全国的なイスラーム教組織である。西

洋社会における自発的な結社と違って、行政機関との緊密な連携の下での「準行政組織」としての一面をもつ。中国におけるイスラーム協会と党、政府との関係については澤井（2011）に詳しい。

3 臥爾茲（ワアズ）とは、モスクにおけるイスラームの二大祭と金曜日の集団礼拝の時行われるイマームの説教のことを指す。クルアーンやハーディスの字句を引用しながら教義を説明することがその中心である。政府政策をムスリムに宣伝するために、愛国主義、男女平等、義務教育などの内容をワアズのなかに織り込む再解釈の実践は現在中国イスラーム教協会の指導の下で展開されている。『新编卧尔兹演讲集』の編集と出版はその一環である。

4 中国イスラーム協会ホームページ『新编卧尔兹演讲集』「尊重妇女保护妇女」http://www.chinaislam.net.cn/cms/sxjs/jiejin/yjj/diyiji/201301/30-5288.html（2017年7月11日アクセス）。

5 同上

6 明末清初の時期、中原地域における女学の創設から改革開放以後に至るその歴史と変容についてはJaschokとShui（2000）が詳しい。一方、近代教育制度に合致する女学は20世紀初頭に創設された。

7 市東北部に位置している「国際商貿城」と呼ばれる400万平方メートルの日常雑貨卸売り専門市場は、2005年時点で国連と世界貿易機構により「世界最大の雑貨卸売市場」と認められた（馬2012）。国内だけではなく、世界各国から商人が買い付けに来ており、その中でも、特に2000年以後、中東、北アフリカなどのイスラーム諸国からのバイヤーが多数集まるようになった。

8 義烏市民族宗教処の統計資料による。一方、流動人口のデータ取得の困難さのため、地方レベルの外来人口統計データの精度には限界があると考えられる。そして、国家の少数民族政策によって、漢族入信者は人口統計上で非ムスリムとして扱われている。

9 本研究で用いる一次資料は筆者が2015年6月から9月および2016年7月から9月、2017年1月に行ったフィールドワークにより収集されたものである。インフォーマントの年齢や婚姻状況などは全て2016年9月時点に基づいている。

10 55歳、河南省の農村出身、国内で十数年、伝統的な経堂教育を受け、その後、サウジアラビアのAl-Imam Mohamed Ibn Saud Islamic Universityで7年勉強し、学位を取った。海外留学の経験を持ち、市内における国外や国内のムスリムの中で人望が厚い。

11 2015年6月行ったインタビューによる。本稿で提示した全てのインタビューは中国語で行った。その内容は引用するとき筆者による翻訳される。

12 山西省大同市近くの町出身であり、両親は共に地元の小学校の先生である。大学時代、学校のムスリム勉強会に参加し、その時、信仰深い先輩たちの姿に憧れて、ムスリムとして

の自覚を持ち始めた。卒業した後、河南省の女学に進学し、1年半をかけて宗教知識とアラビア語を勉強した。2016年5月末に結婚し、西安市に移住した。2015年8月行ったインタビューによる。

13　寧夏回族自治区呉忠市の農村出身である。小さいころイマームを務めた父親が一家を連れて寧夏を離れ、山東省徳州市近くの町で生活するようになった。2011年、女学を卒業後、義烏市に来た。2016年の時点で未婚である。2016年7月行ったインタビューによる。

14　河南省商丘市の農村出身である。両親は都市で商売をしているため、農村にいる祖母に育てられた。宗教に熱心な祖母の影響を受け、中学校卒業後女学に進学した。国内で4年勉強した後、エジプトに留学した。1年後、そこで出会った中国ムスリム男性と結婚し、間もなく妊娠した。子供の世話をするため、学校を退学し、浙江省にある夫の実家に帰った。2013年から義烏市で通訳として働くようになった。2016年7月行ったインタビューによる。

15　「电子商务市场规模及行业规模分析」http://mt.sohu.com/20160711/n458697011.shtml（2017年7月11日アクセス）

16　クルアーンの中で「クライシュ族の保護のため、冬と夏のかれらの隊商の保護のため、かれらに、この聖殿の主に仕えさせよ」（106：1）という記録がある。クライシュ族はメッカで商業活動を営む名門部族であった。預言者ムハンマドはクライシュ族である。ブランド名でムスリム会社としての特徴をアピールしている。

17　29歳のWXは湖北省出身であり、両親は商人である。彼女は大学のムスリム勉強会に参加することを通じて宗教に熱心になった。学生の時代、休みを利用しモスクでクルアーンのアラビア語朗読を学んだ。義烏市に来てから、日常的にスカーフをつけており、ムスリム勉強会の活動に積極的に参加し、金曜日は必ずモスクに行く。

18　募集活動とは、ウィーチャットのグループチャット機能を通じて、代理人になる意向を持つ人たちに会社や商品の紹介などの宣伝活動を通じて、微商への参入を勧めることである。以下引用された内容は2016年6月のウィーチャット上の募集活動の時WXのスピーチの一部である。筆者による翻訳される。

19　本論で取り上げるクルアーンの日本語訳は、1983年、日本ムスリム協会によって発行された『日亜対訳・注解　聖クルアーン』http://www2.dokidoki.ne.jp/racket/koran_frame.html（2017年10月10日アクセス）に基づいている。

20　22歳のAYSは寧夏回族自治区同心市農村出身であり、両親は農民である。小学校中退後、モスクの宗教勉強会に参加した経験はあるが、女学における専門的な宗教知識を学ぶことはなかった。18歳で結婚した後、通訳を務める夫と一緒に義烏市に移住して来た。2017年1月行ったインタビューによる。